

# 飲水思源

町長 松岡市郎

## SOS信号とSOS行政

インターネットで「SOS」を調べてみると、モールス符号の短音と長音の構成からSOSとなつてゐるようだ。また一方では「Save Our Soul」（私たちの命を救え）とか「Save Our Ship」（私たちの船を救え）などにも使われているという。

さて、新聞やテレビでは、景気回復策を織り込んだ国の第2次補正予算や衆議院の解散、そして100年に一度の不況、雇用問題の早期解決と景気後退からの早期脱却が毎日のように報道され、私たち行政は国の展開する補正予算の内容把握に右往左往している。政治も経済も、この世界という大海の中で遭難し、安定した船の救助を求めてSOS信号を発信しているように感じる。

このSOS発信に、私たち行政はSOSをもつて征することが大切、とある会合でお話した。

行政のSOSとは「『S』はスピード感があること。『O』は行政情報に住民へオープンにし、未知や既知のドアを積極的にノックしオープンする行動をとること。最後の『S』は住民サービスの向上を意味し、ハード面の施設づくり、ソフト面の人

間関係づくりが、それぞれ車の両輪のようにバランスが取れていること」を指している。

つまりSOS行政とは「スピード感を持ち、積極的に情報とドアをオープンにし、住民のサービス向上に努める」ということになる。何も新しいことではない、当然のことを当然に実施する力、基本力を発揮することなのだ。

ある大学教授がSOSとは「(So) んなに 大(O) げさに 騒(Sa) ぐな」だと言った。きつと日本には底力が備わっている。その力がいざという時には遺憾なく発揮されることを表現したのでらう。

今年「ウシ、カウ(Cow)、モ」の年である。このSOS時世を乗り切るには「後(ウシ)ろ向き」の姿勢ではなく、常に前に「向かう(カウ)姿勢」を「失(ウシ)なわず」臨めば、「道も(モ)」おのずと開く、となつてほしい。「(So) れが、俺(Ore) たちの、(S) タイル」でもある。

それぞれの分野で、今年モくかった(勝った)。今年モくかった(儲かった)。今年モくよかった(良かった)。「という声が響きわたる年であることを願ひ、頑張りたいものだ。

## 短歌

次の代いかなる日本を見おろすやヌタクカムシユツベの神よ見守れ  
短歌の会午後のひと時師や友に会いて学ぶ深きこの道  
また蕾残りしままの紅ばらに雪降り積むは目にいたいたし  
大駐車場わたしの車見つからず探しあぐねて目を覚ましたり  
老い二人つがなく新年を迎えたり歴史のページ輝きてあれ  
道の辺に誰がため咲くか秋桜は踏まれて折れて尚もやさしく  
何時迄も賞味期限のなき運命ひと日を大事に生きて行きたくし  
去年今年残り少なき余生もてひと日ひと日を静かに送る  
吹き荒ぶ世相の嵐そつとをき忘年会に老いの万歳  
老い二人何事も無く感謝して来る年も亦恙なきよう  
お雑煮の味付うまし三代目のぼる湯気さえゆうろりゆるり  
何も彼も人様任せのこの頃は生きて感謝の我身となれり  
おめでとつと云つてほしくもなければ何かを期待し初日おろがむ

松倉和子  
那須喜美  
瓜生昭枝  
宮坂敬子  
永江栄子  
笹田富士子  
中田治子  
清水チヨ  
矢沢ますえ  
岡澤チズ子  
嶋崎ミエ  
尾池真沙子  
井山一文

## 俳句

神宮に俵つみあげ新嘗祭  
一点の鷹にはじまる冬の空  
雪婆眉ほどの月消えにけり  
冬の月早朝四時は我の空  
新雪のキャンバス揺れて北きつね  
寒村は眠らず木枯吼えまくる  
木枯を背に受け進む道もある  
木枯のむこうに陽がかくれんぼ  
木枯を避ける術なき登下校  
午後五時のバスの窓打つ霰かな  
木枯や荒む人間交差点  
木枯の一夜に散らす妻の声  
語ること盡きたる如し木枯の  
ひじき煮る背に凧の来てたたく

杉山ひろのり  
徳光吐苦  
杉山りつ  
山口佐知子  
高瀬潤  
石澤清宏  
澤田久美子  
松山蓉子  
三島智  
長谷川きみ糸  
小林露葉  
青野公花  
宮坂紫雲  
秋山深雪